

浮遊するウィンドウ

「フロアではなくウィンドウを貸す」



「渋谷な」建築 = 「ウィンドウ」という個性

渋谷の建築群の中で圧倒的にアイデンティティを放っているもの、それが「ウィンドウ」である。そのウィンドウを主体とした、新しい建築のカタチを考えた。渋谷には、単に「多種多様」では形容しきれない複雑さがある。いびつな地形、大小の建築エレメント、目まぐるしいテナントの更新——渋谷において定義不定の建築が、一瞬一瞬の姿を主張しているのがウィンドウなのである。

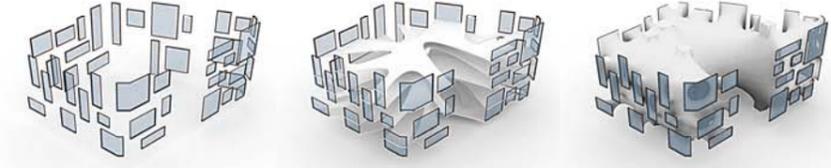


「ウィンドウ」主体の設計手法

賃貸の単位をフロアではなくウィンドウとすることで、街に各々の個性を示すペリメーターゾーンと、異業種が混在して新しいシェアを形作る内部空間が両立される。技術力が飛躍的に向上した現代における「渋谷な建築」は、もはや建築の水平性から開放されてしかるべきである。地面に近いウィンドウは入り口となり、大開口のウィンドウは店舗のショーケースとなり、見晴らしの良いウィンドウは飲食店の特等席となる。それらが連続的に繋がった時、新しい「渋谷な建築」が姿を現す。



①周辺環境に合わせて、様々なウィンドウを3D空間上に配置する。 ②レベル差が小さいウィンドウをスラブで繋ぎ、さらに上下動線を確保する。 ③ウィンドウを浮かび上がらせるようにファサードの曲面をデザインする。



昼と夜の「ウィンドウ」

窓枠をアンカーポイントとして surface relaxation をかけたパラメトリックなデザインは、ウィンドウをより一層際立たせる。昼は通りの景色を映し込み、渋谷を借景したこの建物自体が渋谷の雰囲気の一部となる一方で、夜は内部からのウィンドウから外部に漏れる光で渋谷らしさを発信する、広告塔としての役割も果たす。渋谷には衣類をはじめとする数多くの小売店が混在している。それぞれがウィンドウを介して繋がる事で、新しいシェアのカタチが生まれる。

